＊＊＊　高い精神性に支えられた文明の証明

このたびの東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。また、被災された方々にお見舞い申し上げますとともに、一日も早く復旧・復興がなりますようお祈りいたします。

さて、前回、「水の循環を守った文明」と題して、稲作文化に根差す日本人の高い精神性の由来をたどった。

その直後に日本民俗が遭遇した未曾有の大震災・津波は、多くの犠牲者・行方不明者・被災者をもたらすこととなったが、一方では期せずして全世界に日本人の高い精神性を示すことになった。発災直後から、寄せられた海外からの声には、

- 最大級の規模の地震災にもかかわらず、災害に対する心構え・知恵が浸透しているためか犠牲者がある程度にとどまっている（2004 年に発生したスマトラ島沖地震の死者は 20 万人とも言われている。）。
- このような極限状態にあっても、被災者は整然と行動し、わずかな飲み物食べ物を分かち合いながら忍耐強く日々を送ってる。

というものが多い。

前回、「今世紀は水の世紀でもあり、食料、エネルギーなどとともに地球上の限られた資源のなかですべての生き物の共存が求められることになる。」と記したが、被災者をはじめ多くの日本人が、今このことを体験・実感しているのであり、そのなかにあっても、ガソリンスタンドや救援物資の配布場所で、じっと列を作って順番を待つ姿など、高い精神性に支えられた日本人の行動は、外国人には驚異に映っている様子が伝わってくる。そして、それこそが日本は必ず復興すると確信される源となっているのであり、多くの国々からの支援につながっていると考えられる。

これから本格的にはじまる復旧・復興への取り組み。被災者に寄り添い、ともに思いを分かちながら歩み、自分には何ができるのかを問い、国民一人一人が果たすべき役割を果たしていくことこそ、高い精神性に支えられた文明の証明となるのではないだろうか。本当の正念場を迎えるにあたり、長い道程（みちのり）となるであろうが、相携えて歩んでいきたいと思う。

ここに、2011年3月 31日付、日経「私の履歴書」に載った、建築家安藤忠雄氏の最終稿「日本」を添付した。そこには日本の未来を創造していく上で考えさせられる視点が記されている。氏がいう“日本人が起こした 2 度の奇跡”のキッカケとこのたびの災害は概ね 70 年周期で訪れており、また、その際には、北海道の役割が注目され、この国の課題解決に貢献してきた歴史がある。このたびもまた、国民一人一人が役割をそれぞれ果たすとともに、加えて、北海道には他にはない様々な機能を発揮して復旧・復興に貢献していくことが期待されているのである。

20110405　MS生

2011年(平成23年)3月31日　日本経済新聞　朝刊

私の履歴書

安藤忠雄

㉛

日本

国際社会で先頭を切って走ってきた日本は今、存在感を失い、国際化の波に乗れず、将来像がつかめない。教育は画一的で、政治には信念がない。

そこに大震災が起こった。人間の力のすべてを打ちのめすほどの地震と津波が我々を襲った。自然の猛威にただ呆然とたたずむ。

こういう時こそ、一人ひとりが自分に何ができるのかを自らに問わねばならない。日本人は歴史上2度の奇跡を起こした。そして今再び奇跡を起こし、何としても日本を復活させなければならない。

本来、日本人には素晴らしい国民性がある。自身の経験からみても土木・建築の技術力や、スケジュール・品質・安全衛生の管理能力は世界のトップレベル。他の分野でも繊細で緻密、探求心が強く勤勉な民族として海外から高く評価されてきた。

人間性育む教育に未来

実直な国民性・創造力 回復を

過去の奇跡の一つは明治維新のとき、幕藩体制から近代国家を一気につくったこと。その素地は300を超える諸藩の教育体制だ。現在の一律な教育制度とは異なり、藩ごとの特色が打ち出され、学ぶ人の目的と個性を考慮した教育が行われた。熱意ある柔軟な教育が生み出した人材が新しい時代の扉をこじ開けた。

第2の奇跡は敗戦後、数十年の間に復興し世界有数の経済国にまで発展したことだ。廃虚と化した地で大人たちが寝食を忘れて働き、子どもたちが元気に目を輝かせる姿を見て、海外から訪れた人々は「この国は必ず復活する」と口をそろえたという。

しかし、「経済大国」といわれ始めた1969年ごろから、実直な国民性が色あせてゆく。私が仕事を始めたのもちょうどこのころだ。70年の三島由紀夫の防衛庁占拠・割腹事件は、今思えば、以降の日本の凋落を暗示する警鐘だったのかもしれない。

人々は考えなくなり、闘わなくなった。経済的な豊かさだけを求め、生活文化の本当の豊かさを忘れてしまった。未来を担う子どもたちは親の敷いたレールの上を走るのに精いっぱいで、創造力を養うための貴重な時間を失っている。

本来、子どもは友達と自由に、自然と戯れながら遊ぶ中で好奇心を育み、感性を磨き、挑戦する勇気や責任感を養う。今、子どもたちは過保護に育てられ、自分で考える体験が絶対的に不足しており、緊張感も判断力も、自立心もないまま成人し、社会を支える立場に立つ。

筆者直筆のメッセージと似顔絵判

正しい価値観で物事を決めることができず、国際社会で立ち遅れている今の日本と、子どもの教育を取り巻く状況は決して無関係ではない。

私は自分で生きる力を身につけなければならないという思いを人一倍強く持ってきた。だから、自分の意思が希薄で、人と直接ぶつかり合おうとしない、芯の弱い今の若者や子どもをみていると、日本の将来に強い危惧の念を覚える。

人間性を育む教育を行い、自分なりの価値観をもつ「自立した個人」をつくり、家族や地域への愛情をもった日本人の国民性を回復しなければ、未来は見えてこない。

フランスの詩人ポール・クローデルは同じく詩人で友人のポール・ヴァレリーに「私はこの民族だけは滅びてほしくないと願う民族がある。それは日本民族だ」と話したという。その日本は存亡の危機にある。今こそ第3の奇跡を起こすべく、日本は真に変わらなければならない。

（建築家）

＝おわり

あすから前米大統領ジョージ・W・ブッシュ氏